

(ページ番号標記の上、ここでページを区切ってください)

2. 事業の目的と概要	
(1) 事業概要	フィリピン政府は農業省所管繊維開発局 (F I D A) 及び科学技術省所管繊維研究所 (P T R I) 等が中心となってフィリピンの国内蚕糸業の現状分析を行い①生糸の供給不足、②高品質の絹製品の欠乏、③繊維産業就業者の低減、④農家の桑生産、製糸業からの撤退、⑤蚕、繭の移送コスト高騰の調査結果を出した。そこで、同政府はネグロスシルク事業で一定の成果を上げた当法人に対し同事業をモデルとする養蚕普及による全国展開への協力を要請してきた。 当事業ではその要望に応えるためネグロスシルク生産組合の協力の下、対象州地域 (ルソン島ベンゲット州・ヌエバビスカヤ州、パナイ島ア克蘭州・イロイロ州・アンティケ州、ミンダナオ島東ミサミス州) より選抜された①養蚕振興リーダー育成のためのセミナー、②モデル農家育成のための技術研修、③各州地域での日本人専門家及び担当スタッフによる農家を対象としたセミナー及び実施指導、④各州代表者の訪日研修を実施するものである。 This project aims to (1) train leaders for sericultural development, (2) conduct technical training to develop model farmers, (3) carry out seminars and training by Japanese experts, (4) organize visits for Filipino representatives for observing the sericultural situation in Japan.
(2) 事業の必要性 (背景)	フィリピンは昔からマニラ麻など天然素材を利用した織物が盛んで国内はもとよりヨーロッパなどにも輸出されている。特にアバカ (マニラ麻) やピーニャ (パイナップル繊維) を緯糸に使ったバロン・タガログ (民族衣装) は国民の礼服として着用されている。経糸の生糸は一部の国内産と中国などからの輸入に頼っており、年間で必要とされる生糸量は約 7t である。その内の約 1.5t が国内で生産されている。 フィリピン政府は全ての生糸を純国産にすべく、過去には農業省所管繊維開発局 (F I D A) 及び科学技術省所管繊維研究所 (P T R I) が中心になって国外 (U N D P、F A O、K O I C A、J I C A 等) からの支援を受けて養蚕開発に取り組んできたが、期待した成果には至らなかった。 そうしたなか当法人は 20 有余前からネグロス島に於いて養蚕支援事業を展開し一定の成功を収めており、現在では 100 戸の農家により約 10t の繭が生産されている。加工して約 1.2t の生糸がネグロスシルク生産組合により生産されており国内産生糸の 90% を占めている。今日、西ネグロス州政府は養蚕業のさらなる拡大に向けて新たな予算を組んで積極的に推進している。 1980 年代後半、砂糖の国際価格の暴落によりフィリピンの砂糖生産量の 6 割を占めるネグロス島は一時飢餓の島と化した。西ネグロス州政府は特に貧困に陥った山間地農民を中心にした支援を当

	法人に要請。当法人は、調査の結果を受けて当該地域が養蚕に適していることを確認し、１９９５年より本格的に養蚕の普及活動を開始した。農民にとって初めての養蚕であったが、日本人専門家の指導が実り、翌年１．３ｔの乾繭がフィリピン史上初日本に輸出された。この実績数値は日本の農水省統計表にも掲載された。 １９９８年、繭の製品価値を高めるために外務省草の根無償資金協力支援を受けて埼玉県より無償譲渡された自動繰糸機と併せて他の製糸機械一式を現地に導入し生糸生産に移行した。日本の蚕種と機械技術により生産された高品質の生糸は、繊維開発局（ＦＩＤＡ）を通じて国内の絹織物機屋（パナイ島ア克蘭州を中心に約３００軒）で使用されるようになった。国内で質の高い生糸の生産が実証されたことにより、機織業者の喜びと期待は大きく膨らんだ。 ２０１０年から３年間にわたるＪＩＣＡのシルク産業支援事業による後押しがさらに大きな成果に結びついた。 ① 養蚕に従事する農家は収入が２～２．５倍に増えた。 ② 子供が学校に通えるようになった。 ③ 家畜（牛、豚）の購入や土地を借用して桑畑を拡張した。 ④ バイクを購入し活動範囲が広がった。 ⑤ 母親が都会に出稼ぎに出て行く必要がなくなり、父親も砂糖黍畑での日雇い労働から解放され家族と一緒に生活できるようになった、など農民の生活は飛躍的に向上した。 ２００７年、日本 NGO 支援無償（外務省）の支援を受けて蚕種製造所を設置した。長年の懸案であった蚕種を日本からの輸入に頼らず現地で確保できるようになり、蚕病に強く、繭の大きさ形が一定の蚕種を提供できるようになった。現在、同製造所で日本人専門家の指導の下、蚕種の育種を学んだ前担当責任者がタイからの要請を受けて定期的に指導に出向いている。養蚕における初の南南協力の実例として高く評価されている。 ２０１５年、マニラで開催された APEC に於いてアキノ大統領（当時）の提案により、ネグロスシルク生地のパロン・タガログ（民族衣装）が各国首脳に贈呈された。 貿易産業省（ＤＴＩ）は国内の繊維市場で中国の安価なシルク製品が席巻しているのを受けて、マーケットにおける高品質なシルク製品の需要の高さを求めてネグロスで生産されている高品質製品の全国展開に期待を寄せている。 当事業はネグロスシルク事業を高く評価したフィリピン政府の関係機関が足並みを揃えて養蚕の全国展開に期待を寄せるものであるが、その背景にはこれまで当法人が１９７０年来、フィリピンの農村開発を目的に農村青年を対象にした地道な人づくり活動が現地にしっかり根付いてきたことがそのベースとしてあり、ネグロスシルク事業の成果に繋がったと言える。 ●「持続可能な開発目標(SDGs)」との関連性 蚕糸業は女性の雇用機会の創出、また女性の能力強化や社会的自立を促進するとして、ジェンダー平等なレジリエンスの高い経済基盤創出に貢献する。同時に女性の蚕糸業への参加により子供への安定した教育が可能となると共に家族計画に繋がることが期待され
--	---

る。

養蚕は比較的天候に左右される作物栽培に対して、僅か約 1 ヶ月サイクルで、確実に現金収入を得ることが出来るため、特に生活の厳しい山間地の農民には相応しい。とりわけ農村社会の貧困、脆弱、飢餓、欠乏にあえぐ最貧層に光を当て、彼らの生活レベル向上を具現化する。

桑の栽培は荒廃した土地でも生命力が強く、山の緑化対策にも適している。また落葉せず 1 年中葉が生い茂っているため蚕を飼うことによって、安定した生活が保障される。

織物としてのシルク製品が市場に出回ることにより、フィリピン独自のシルク産業の発展へと期待され、雇用の機会が生まれ、安定した社会の構築が期待される。

これらは「持続可能な開発目標 (SDGs)」が掲げるターゲットに合致した取り組みである。特に当該目標のうち、

- ・ 目標 1 (1. 1)

2030 年までに、現在 1 日 1.25 ドル未満で生活する人々と定義されている極度の貧困をあらゆる場所で終わらせる。

- ・ 目標 1 (1. b) 貧困撲滅のための行動への投資拡大を支援するため、国、地域及び国際レベルで、貧困層やジェンダーに配慮した開発戦略に基づいた適正な政策的枠組みを構築する。

- ・ 目標 2 (2. 1)

2030 年までに、飢餓を撲滅し、全ての人々、特に貧困層及び幼児を含む脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養のある食料を十分えられるようにする。

- ・ 目標 2 (2. 3)

2030 年までに、土地、その他の生産資源や、投入財、知識、金融サービス、市場及び高付加価値化や非農業雇用の機会への確実かつ平等なアクセスの確保などを通じて、女性、先住民、家族農家、牧畜民及び漁業者をはじめとする小規模食料生産者の農業生産性及び所得を倍増させる。

- ・ 目標 2 (2. 4)

2030 年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水及びその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食料生産システムを確保し、強靱 (レジリエント) な農業を実践する。

- ・ 目標 5 (5. 1)

あらゆる場所におけるすべての女性及び女兒に対するあらゆる形態の差別を撤廃する。

- ・ 目標 8 (8. 5)

2030 年までに、若者や障害者を含むすべての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事、ならびに同一労働同一賃金を達成する。

- ・ 目標 9 (9. 4)

2030 年までに、資源利用効率の向上とクリーン技術及び環境に配慮した技術・産業プロセスの導入拡大を通じたインフラ改良や産

	業改善により、持続可能性を向上させる。すべての国々は各国の能力に応じた取組を行う。 ・目標 15 (15. 1) 2020 年までに、国際協定の下での義務に則って、森林、湿地、山地及び乾燥地をはじめとする陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。の達成に貢献していると考える。 http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf ●外務省の国別開発協力方針との関連性 (1) 持続的経済成長のための基盤強化 当法人は創立以来、人材育成を活動の大きな柱に据えて国際協力を行ってきた。本事業でも先ずは養蚕普及のための人材育成を主眼においた活動を予定しており、まさに今日ネグロスシルク事業の発展を構築してきたのも人材である。ひとりでも多くの有能な人材が生まれることが養蚕普及の拡大に繋がり、事業終了後も継続し安定したシルク事業が期待されるものと見ている。その積み重ねが強いフィリピンの持続可能な経済発展に繋がっていく。 (2) 包摂的な成長のための人間の安全保障の確保 フィリピン国内で未だ生活苦を強いられている農村社会を対象とした養蚕の普及は女性を中心に取り組みやすい家業として関心は高い。一定の収入を得ることによって生活の向上がみられる農村地域は安定している。一時ネグロス島でも発生した NPA (反政府ゲリラ) 活動の鎮静化に当時養蚕普及が与えた影響は決して少なくない。 (3) ミンダナオにおける平和と開発 当事業ではミンダナオ島東ミサミス州での普及活動がある。当法人は 1970 年代初頭よりミンダナオでの農村開発のための人材育成や植林活動を展開し大きな成果を上げている。養蚕普及を通じて地域住民との密接な関係を保持しながら、これまで培ってきた経験と実績を養蚕普及を通じて実践していくことで、フィリピン政府が目指すミンダナオの安定化に大きく貢献していくものと考える。 日本国の対フィリピン開発協力の狙いとする「戦略的パートナーシップ」の一環として、当事業は貴重な存在となることが期待される。 http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/seisaku/kuni_enjyo.html ●「T I C A D VIにおける我が国取組」との関連性 なし http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000183834.pdf
(3) 上位目標	フィリピンにおける蚕糸業が発展する。

(4) プロジェクト目標 (今期事業達成目標)	ネグロスシルク事業をモデルとする養蚕普及振興のためのリーダー及び養蚕短期研修による農家育成を通じて国内6州（ベンゲット州、ヌエバビスカヤ州、東ミサミス州、アクラン州、イロイロ州、アンティケ州）に養蚕普及が図られ、養蚕農家の誕生とともに繭及び良質の生糸が増産される。																																																																					
	各州における養蚕普及のためのリーダー育成セミナー及び養蚕農家向け短期研修、さらに桑苗植え付けによる桑園整備等に重点を置き、蚕飼育試験によるモデル農家の誕生を目指す。																																																																					
	① 地区リーダー 66名																																																																					
	② 養蚕農家及びモデル農家 85名																																																																					
	③ 訪日研修による日本の蚕糸業理解 9名																																																																					
	※2年次及び3年間の目標 ①～③																																																																					
	<table><tr><td>項目</td><td colspan="2">②</td><td colspan="2">②</td><td colspan="2">③</td></tr><tr><td>州・年</td><td>2年次</td><td>3年間</td><td>2年次</td><td>3年間</td><td>2年次</td><td>3年間</td></tr><tr><td>ベンゲット</td><td>12</td><td>30</td><td>10</td><td>30</td><td>2</td><td>8</td></tr><tr><td>N. ビスカヤ</td><td>6</td><td>12</td><td>5</td><td>10</td><td>1</td><td>2</td></tr><tr><td>アクラン</td><td>12</td><td>60</td><td>10</td><td>40</td><td>1</td><td>3</td></tr><tr><td>イロイロ</td><td>12</td><td>30</td><td>20</td><td>40</td><td>1</td><td>3</td></tr><tr><td>アンティケ</td><td>12</td><td>30</td><td>30</td><td>60</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>東ミサミス</td><td>12</td><td>30</td><td>10</td><td>30</td><td>2</td><td>8</td></tr><tr><td>合計</td><td>66</td><td>192</td><td>85</td><td>210</td><td>9</td><td>27</td></tr></table>							項目	②		②		③		州・年	2年次	3年間	2年次	3年間	2年次	3年間	ベンゲット	12	30	10	30	2	8	N. ビスカヤ	6	12	5	10	1	2	アクラン	12	60	10	40	1	3	イロイロ	12	30	20	40	1	3	アンティケ	12	30	30	60	2	3	東ミサミス	12	30	10	30	2	8	合計	66	192	85	210	9	27
	項目	②		②		③																																																																
	州・年	2年次	3年間	2年次	3年間	2年次	3年間																																																															
	ベンゲット	12	30	10	30	2	8																																																															
N. ビスカヤ	6	12	5	10	1	2																																																																
アクラン	12	60	10	40	1	3																																																																
イロイロ	12	30	20	40	1	3																																																																
アンティケ	12	30	30	60	2	3																																																																
東ミサミス	12	30	10	30	2	8																																																																
合計	66	192	85	210	9	27																																																																
④ 生繭生産																																																																						
2年次の目標 12,000kg（6州：2,000kg）																																																																						
3年間の目標 20,000kg（6州：4,000kg）																																																																						
⑤ 生糸生産																																																																						
2年次の目標 1,500kg（6州：240kg）																																																																						
3年間の目標 2,400kg（6州：480kg）																																																																						
(5) 活動内容	養蚕普及は蚕飼育と桑園づくりに大きく左右されることから直ぐには結果がでないものの、1年次の取り組みの影響を受けて新たに3州からの協力要請を受けて、2年次は合わせて6州を対象に活動を行っていくこととする。併せて1年次同様、ネグロス養蚕を基盤としてフィリピン政府関係機関（農業省-FIDA、科学技術省-PTRI、貿易産業省-DTI）とネグロスシルク生産組合、さらに地元自治体の協力のもと以下の活動を引き続き展開していく。 1. 各州地域養蚕振興のためのリーダーを対象とするセミナー 第1年次は、養蚕振興のためのセミナーに参加する代表者を地区の農業局や農業委員、農業組合役員などから選抜した。その選抜等の目的により、提携団体であるPTRI、FIDAの担当者と現地にて協議を重ねた結果、6月の代表者訪日研修後同セミナーを行いたいという意向が出される等、受講側に積極性が見出された。その積極的な意向を尊重し、本年度も同様に当該セミナーを実施する。 第2年次は、各当該地域（ルソン島 北西部＝ベンゲット州、同北東部＝ヌエバビスカヤ州、パナイ島 北西部＝アクラン州、同南部＝イロイロ州、同西部＝アンティケ州、ミンダナオ島 北東部＝																																																																					

東ミサミス州、以上 6 州)において養蚕を普及し、定着させていくため、地区の農業局や農業委員、農業組合役員などから代表を選抜し、養蚕振興のためのセミナーをおこなう。該当者は州政府や市など行政との調整役を担い、拡大発展のための予算確保や普及計画等に不可欠とされ、地域の養蚕普及を左右する重要な役割を担う。同セミナーは西ネグロス州政府所有の施設を活用して行う。

・各州 6 名ずつ 2 回/年 (ヌエバビスカヤ州 1 回/年) 実施予定

2. 養蚕を目指す農家対象の短期研修

第 1 年次は、各州地域において養蚕を目指す農家を対象とした短期研修に参加する代表農家を選抜した。当該研修は桑の成長及び病蚕等を勘案し、雨季に入る 6 月頃より実施したいところであったが、今年上半期の乾季は非常に厳しく、研修所の桑の成長にも影響したため蚕の飼育には適さなかった。したがって、「蚕」から「生糸」までの一連のシステムを実地で具体的に説明するのは不十分であったために、同研修を下半期の後半に延期して実施した。

また、対象農家はとうもろこし、野菜等の農産物を主要収入源にしているが、雨季はその栽培に多忙となることは否めない。したがって、1 か月自身の畑を離れて養蚕研修を受けるのは難しく、さらに、養蚕業からの収入額は上記産物と比較して低いだけに、強制することは難しいのが現状である。

上記のような現状を考慮し、第 2 年次は研修期間を 1 ヶ月から 3 週間に短縮して同研修を実施する。(具体的研修内容は別紙参照)

受講者は地元での普及拡大に重要な役割を果たすモデル農家を目指す。

《各州 5 名ずつ実施》

- ・ヌエバビスカヤ州 1 回/年
- ・ベンゲット州・東ミサミス州・ア克蘭州各 2 回/年
- ・イロイロ州 4 回/年
- ・アンティケ州 6 回/年。

3. 日本人専門家及び現地タッフによるセミナー及び実地指導

日本をはじめ世界の養蚕及び蚕種分野においてトップレベルの経験と実績を有する専門家によるセミナー及び実地指導をセットで行う。各セミナーでは 40～50 名の参加者に対して、先ず「養蚕」についての概要を説明。そして、主に桑の管理方法と蚕の基礎的な知識に関して説明をおこない、桑の植え方から剪定、肥料の作り方、そして収穫の仕方について説明する。蚕に関しては、蚕の一生(ライフサイクル)、習性、蚕が育つ蚕室、そして蚕の飼い方の注意点について説明する。養蚕を初めて行う農家もあるため、できるだけ理解しやすいように、写真や動画を使用し、実際に目に見える形で行うよう工夫する。

次に実地指導では既存の養蚕農家に実際に出向き、各地の桑の状況、成長具合に合わせて桑の植え方、選定の仕方などを手取足取りして分かり易く指導する。専門家は常に現地スタッフとコミュニケーションを取りながら、それぞれの問題や疑問に対して丁寧に答え、親身に相談に乗ることで技術の向上だけでなく、養蚕農家のモチベーションも期待できる。

第 1 年次は 7 月上旬時点で、ア克蘭州イバハイ町（3 月 28 日）、東ミサミス州クラベリア町（4 月 2 日）において、セミナー及び実地指導を実施した。ア克蘭州では 4 5 人、東ミサミス州では 1 3 2 人の農家が参加した。両州における日本人専門家セミナーに対する出席者の集中力は非常に高く、多数の質疑応答がなされた。特に、養蚕業の経験のない農家が多数参加した東ミサミスのそれでは、講義終了後農家が主体的に今後の取り組みについて話し合いを行い、後日 P T R I スタッフがフォローアップに勤めていた。まさにオイスカと協力団体の「協働」のなせる業である。

上記を踏まえ、第 2 年次は引き続き、国内外の養蚕事情に精通した専門家によるセミナー及び農家への実地指導を行う。

《開催地》・ 6 州 4 ケ所》

- ・ ベンゲット州ラトリニダッド町 → 2 回／年
- ・ ヌエバビスカヤ州ジャディ町他 → 1 回／年
- ・ ア克蘭州イバハイ町、イロイロ州ランブーナオ町、アンティケ州サンホセ町/シバロム町 → 1 回／年、3 州合同開催
- ・ 東ミサミス州クラベリア → 1 回／年

《参加人数》・ 各州 4 0 ～ 5 0 人》

4. 各州地域代表者の訪日研修

第 1 年次は、令和元年 6 月 6 日～ 1 2 日、各州地域より政府機関を中心とした代表者 9 人が日本の養蚕事情視察プログラムに出席した。「蚕業技術研究所」「蚕糸科学研究所」において日本の最新技術、歴史に関する講義が受け、最新の製紙機械を視察し、「駒ヶ根シルクミュージアム」において、日本の養蚕業の歴史を学んだ。貴重な高レベルの養蚕技術を保持しながら、その継続のための人事育成に労苦している現実を目の当たりにし、参加者はフィリピンの養蚕業との共通性、フィリピン国の養蚕業発展への期待を体感した。また、参加者の希望により、「高原社桑園」を視察し、養蚕業のベースである丁寧に管理された桑の木々を見て、日本の養蚕業の大家である宮澤専門家に、切れ目なくコメント、疑問点が投げかけられていた。「現地」でしか習得することのできない瞬間の数々であった。

第 2 年次は、1 年次同様、各州地域から代表者を選抜し、日本の養蚕事情視察プログラムを実施する。日本は昭和初期において、世界の生繭生産の 6 割を生産し、その技術レベルは世界の蚕糸業（養蚕業及び生糸業）を牽引してきた。今日時代の流れと共に日本国内の養蚕農家は 3 0 0 戸ほどにまで減少しているが、長年に亘り培われた技術は群馬県、山梨県、長野県等の養蚕農家で現在も引き継がれている。

特に桑園管理において、フィリピンは火山灰土壌が多く、即ち痩せた土壌であるが、日本は痩せた狭い土地条件にもかかわらず、土壌改良技術を重ね、上記のごとく生産量を高めた。また、稚蚕飼育（1 令から 3 令）は、その後の作柄を左右する重要な期間で、一ヶ所に集中した飼育管理法を体験学習することは極めて重要であり意義が大きい。さらに防疫体制について、消石灰の使用法などを学ぶことで膿病を防ぐなど、訪日することにより、関係者から直接見聞や体得できることは極めて有益である。

当プログラムの遂行は、現地の養蚕業の指導者である同研修参加者の知的モチベーションの深化がもたらされ、参加者及びコミュニティの日々の実地活動の充実へと繋がっていく。

なお、訪問予定の「大日本蚕糸会」「蚕業技術研究所」等の研究機関、シルクセンター、養蚕農家等の視察や技術体得などの受入体制は万全に整っている。

・各州より選抜された 9 人を対象に 1 回/年。令和 2 年 6 月に 1 週間実施予定。

5. 持続発展に向けたフィリピン政府等、各関係機関との取組の実施
フィリピン政府においてはネグロスシルク事業を高く評価し、関係機関を通じて具体的な取り組みが実施されている。

① 科学技術省所管の繊維研究所（PTRI）がシルク産業の全国普及に向けてルソン島、ミンダナオ島で蚕種製造所の再建設、蚕品種の導入、繅糸機の設置等を計画及び一部実施中。計画の中にはネグロスシルク生産所内の蚕種保存冷蔵施設設置が進められている。

② 上記 4. 訪日研修時の「フリー・ディスカッション」の際に、東ミサミス州、FIDA リージョン 10、PTRI リージョン 10 及びオイスカの四者で「養蚕業発展小委員会」が結成され、今後当 N 蓮推進をスムーズに推進していくために、定期的に会合を開催することになった。第 1 回は 8 月初旬の予定である。

③ マラニオン元西ネグロス州知事によって執行された、養蚕業に対する予算は、州内で 22 箇所ある農業組合に分配されている。36 箇所建設予定の荘蚕所は既に 15 建設されており、今後とも予定通り当状況が継続されるであろう。

なお、懇意にしていたピニョル農業大臣の突然の辞任により、昨年表明されていたネグロス養蚕プロジェクトへの支援は、残念ながら立ち消えになった。

裨益人口

単位：人

活動地域	直接裨益者数	間接裨益者数
ベンゲット州ラトリニダッド	280	2800
ヌエバビスカヤ州ジャディ他	360	2160
ア克蘭州イバハイ	370	3700
東ミサミス州クラベリア	280	2800
イロイロ州ランブーナオ	220	2200
アンティケ州サンホセ、シバロム	450	4500
西ネグロス州バゴ市（訪問者等）	9000 ～10000	90000 ～100000

※裨益人口は上記表の通りで、直接裨益者は家族、知人をはじめ地域コミュニティから全国に広がって行くことになり、間接的に裨益する数は約 10 倍以上になる。さらに養蚕の普及により

	生糸生産が増大し、絹織物業やデザインといったシルク産業に携わる人々は必然的に増大していく。さらに全国規模の拡大となれば図りしれないほどの裨益人口になっていくことが予想される。
(6) 期待される成果と成果を測る指標	① 地区リーダーセミナー 各州地域の農業事情を把握している地元農業関係者から選抜されたリーダーが養蚕普及の必要性について学ぶことで、当該地域農民への適切なアドバイスや養蚕振興のための普及体制を築くことになり、農家に対する継続支援が可能となる。 〔指標〕：各州 12 名のリーダーが誕生する。(ヌエバビスカヤ州 6 名) 〔方法〕：ネグロスシルク生産組合によるモニタリング ② 農家短期養蚕研修 養蚕研修を受講することによって以下の成果が生まれる。 a. 養蚕の基礎的知識及び技術が身につく。 b. 蚕の催青、孵化、掃立てについて理解し、実体験することにより、特に細やかな管理が求められる稚蚕飼育の知識と技術が身につく。 c. 蚕から繭になる上簇のタイミングが分かり、上質繭生産のための知識と技術が身につく。 d. 研修施設において模範的飼育所を活用することによって、蚕の病気予防のための知識及び技術が身につく。 e. 給桑のタイミングを身に着けることができる。 f. 養蚕農家としての能力が身に着き、地元への養蚕普及のためのモデル農家の誕生につながる。 上記の成果 a～e は研修終了時のテストによって、f についてはモニタリングによる当該農家訪問時によるインタビュー等から確認する。 また、当プロジェクトの大きな狙いは、「蚕」を農家、(重作業でないだけに) 特に女性に身近なものに感じてもらうことにある。「モデル農家」の存在は、保守的な地方の農家にとっては精神的な支柱になると同時に、新たな収入源の出現となる。 〔指標〕：2 年次 ・ベンゲット・東ミサミス・ア克蘭の 3 州は 5 名ずつ 2 回/年 → 10 名 ・ヌエバビスカヤ州 5 名の 1 回/年 → 5 名 ・イロイロ州は 5 名ずつ 4 回/年 → 20 名 ・アンティケ州は 5 名ずつ 6 回/年 → 30 名 合計 85 名/年の養蚕農家&モデル農家が誕生する。 〔方法〕：各地域の関係機関 (FIDA、PTRI、DTI) によるモニタリング ③ 専門家による各地区セミナー及び実施指導 今事業の当該各州地域の土地事情や気象環境を理解している専門家及び現地スタッフによるセミナー及び実施指導から以下の

成果が生まれる。

- A. セミナーが地元言語を解する現地スタッフの通訳及び補助説明によって行われるため、初めて養蚕に触れる参加者にとっても養蚕に関する知識及び関心が容易に高まる。
- B. セミナーでは既存養蚕農家からの実体験に基づいた質問応答も行われるため、養蚕の事態が理解しやすく養蚕へ知識と関心が一層高まる。
- C. 実施指導では実際に桑畑や飼育所に於いて専門家自ら実例を示しながら懇切丁寧に指導するため農家の養蚕技術が向上する。
- D. 日本の優れた技術を直接受けることで養蚕に対する関心は高まり、農家のモチベーションがさらに高まる。

上記の成果 A. B. についてはセミナー終了時によるインタビューを通して確認する。C. D. については実地指導現場での確認と共に後日の農家訪問時によるインタビューから確認する。

一方、セミナーにおいて「繭」→「生糸」→「シルク」の流れが丁寧に説明され、フィリピン（ネグロス）の絹製品が世界で必要とされていることを理解することになるが、そのような産業に携わることにより、収入の道の選択肢と同時に、「フィリピン人」としての名誉を得られることに繋がる。

〔指標〕：6 州 40 名～50 名ずつの参加者。

《6 州 4 ケ所》

- ・ベンゲット州 → 40 名 × 2 回／年 → 80 名
- ・ヌエバビスカヤ州 → 40 名 × 1 回／年 → 40 名
- ・アクラン州、イロイロ州、アンティケ州 → 3 州 × 40 名 × 1 回／年 → 120 名（合同開催）
- ・東ミサミス州 → 50 名 × 1 回／年 → 50 名

合計 290 名（2 年次）

〔方法〕：各地域の関係機関（FIDA、PTRI、DTI）によるモニタリング

④ 各州代表による訪日研修

全国の対象地域から選抜された代表者による訪日視察研修を実施することにより、次の成果が生まれる。

- a. 日本の蚕種製造現場における専門家の解説及び実演を通して蚕種製造の知識が高まる。
- b. 世界に誇る日本の蚕糸業分野を視察することにより、フィリピンでの蚕糸業開発に向けたプラン作りの基礎が身につく。
- c. 日本でも最高の養蚕技術を持つ養蚕農家を直接訪問することにより、優れた稚蚕、飼育さらに上蔭技術が得られる。
- d. さらに農家主がフィリピンの養蚕に精通していることから全ての質問に対して的確な回答が得ることができ、研修員のフィリピン養蚕への知識が向上する。
- e. 見本とされる優れた桑園内の現場において土壌管理、肥料管理、桑植え付け管理についてその実際を学ぶことで、理想とする桑園管理の知識と技術が向上する。

	f. 参加者が帰国後それぞれの所属組織の中に日本で学んだ知識や技術がインプットされる。 g. ひいては、各々の報告書、セミナー等において、養蚕農家にもフィードバックされる。 上記の成果については帰国前のインタビューと帰国後の当該州へのモニタリング調査及び養蚕普及率の度合等を目安に確認する。 ・各州からの代表者 9 人が参加/年 〔指標〕：訪日研修員によるフィリピン帰国後の PR 活動の展開。 〔方法〕：各地域の関係機関（FIDA、PTRI、DTI）によるモニタリング 付随しての成果（ネグロス及び 6 州） (1) 繭の生産量 第 1 年次：11,000kg 第 2 年次：12,000kg 第 3 年次：20,000kg (2) 生糸生産量 第 1 年次：1,400kg 第 2 年次：1,500kg 第 3 年次：2,400kg http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000183834.pdf :
(7) 持続発展性	事業実施当該 6 州（ベンゲット州、ヌエバビスカヤ州、アクラン州、イロイロ州、アンティケ州、東ミサミス州）は当初より政府の関係機関（PTRI、FIDA、DTI）の指導管轄下にあり、事業終了後は元州農業局と密に連携が図られ、推進していくことになる。本事業において地域の養蚕普及振興を担うリーダーが育成されることは大きく、事業終了後も関係機関やネグロスシルク生産組合と連携を保ちながら、地元養蚕組織の発展に尽くしていくと確信する。 また、新たな蚕種の確保や必要に応じたサポートは、ネグロスシルク生産組合と PTRI と関係協力により、必要に応じて優良蚕種の確保が可能となり、持続性が担保される。 当事業が順調な推進を遂げることにより、5、6 年後に現状の約 4 倍強に値する繭 41t、生糸 4.5t の生産が現実的な数値として挙げられる。FIDA は、生糸の特性 1) パインアップル、アバカ、バナナ、綿との混織の際の必要性、2) 高級感のあるバロンタガログ等の需要の高まり、3) 環境へのやさしさ、4) 販売価格の高さ等から、上記数値を 3 年後に達成すると予測しており、生糸の海外輸出増加も十分に予想されている。 さらに、Phil.FIDA,PTRI,DTI は、機織のセミナー、研修などの支援を頻繁に行って、機織グループを多く作ろうとしており、養蚕（シルク）事業は、政府機関と協働して、機織産業と共に発展していく見込みが十分にあるため、持続発展性大であると言える。 各州地域の於ける政府関係機関は以下のとおり。

(様式 1)

	・ ルソン島ベンゲット州 & ヌエバビスカヤ州 → FIDA Manila Laboratory Office ・ パナイ島ア克蘭州 → PhilFIDA Aklan Prvincial office ・ パナイ島イロイロ州 → Technical assistance unit of PhilFIDA Region VI ・ パナイ島アンティケ州 → Product Development office, DTI Antique ・ ミンダナオ島東ミサミス州 → PTRI Claveria Branch Office
--	--